



© Fumiyo Kouno/
Futabasha/Konosekai no
katasumini Project

第21回アニメーション部門大賞

📍 国営沖縄記念公園(海洋博公園)

『この世界の片隅に』 片渚 須直

こうの史代の同名マンガ(2008-09)を原作に、『マイマイ新子と千年の魔法』(09)で監督・脚本を務めた片渚須直が6年の歳月をかけて劇場アニメーション化した作品。2015年に開始したクラウドファンディングで3,000人以上のサポーターから制作資金の一部を集め完成した。2016年11月の公開以降、ロコミヤSNSで評判が広まり、2018年に入っても上映が 続くロングラン作品となっている。主人公のすずは昭和19(1944)年、18歳で広島島の呉に嫁ぎ、あらゆる物資が欠乏していくなかでも、一家の主婦として生活に工夫を凝らす。だが、戦争は進み、日本海軍の拠点だった呉は、幾度ももの空襲に襲われる。本作には、大事に思っていた身近なものを次々と奪われながらも、前向きに日々の営みを続けるすずと、彼女を取り巻く人々が描き出される。文献や地図、現地調査、当時そこに住んでいた人へのヒアリングなどの綿密な考証により、現在は見ることができない広島島の街並みが再現されている。史実とリンクしている箇所は、その日時の天候までも忠実に作品に反映させる徹底ぶりで、すずたちの生きる世界の実在感を補強している。



© 2016 TOHO CO., LTD. /
CoMix Wave Films Inc. /
KADOKAWA CORPORATION /
East Japan Marketing &
Communications, Inc. /
AMUSE INC. /voque ting co., ltd. /
Lawson HMV Entertainment, Inc.

第20回アニメーション部門大賞

📍 国営沖縄記念公園(海洋博公園)

『君の名は。』 新海 誠

『秒速5センチメートル』(2007)や『言の葉の庭』(2013)など、意欲的な作品を数多くつくり出してきた作者による劇場アニメーション作品。山深い田舎町の女子高生・宮水三葉(みやみずみつは)は、ある日、自分が東京の男子高校生になる夢を見る。一方、東京で暮らす男子高校生・立花瀧(たちばなたき)も、山奥の町で自分が女子高生になっている夢を見る。繰り返される不思議な夢と抜け落ちた記憶や時間から、三葉と瀧は自分が夢のなかで入れ替わっていることに気づく。2人は戸惑いながらも現実を少しずつ受け止め、互いに残したメモを通し、ケンカをしながらも状況を乗り切っていく。千年に一度の彗星来訪という出来事を舞台に、少女と少年がお互いを知り、求めあう恋と奇跡の物語。世界の違う2人の隔たりとつながりから生まれる「距離」のドラマを、圧倒的な映像美とスケールで描き出している。作者による緻密なロケーション設定とそれを支える確かな風景描写に、世界観を持った音楽が加わることで、ファンタジックな物語をより強いリアルティとともに表現している。

第21回アニメーション部門優秀賞

📍 国営沖縄記念公園(海洋博公園)

『COCOLORS』 『COCOLORS』制作チーム / 代表:横嶋 俊久

有害なバクテリアを含んだ灰から逃れるために、人類がスーツとマスクをしながら地下で生活する世界を舞台にしたアニメーション作品。嘘ばかりつく少年アキと、楽器だけで会話する少年フユの、マスクで表情が見えない中に生まれるコミュニケーションを軸にして地下世界に訪れる危機が描かれる。監督と脚本を担当した横嶋俊久は、マスクで顔が見えないという設定を生かし、身ぶり手ぶりや走る、跳ねるといった動きによって、それぞれのキャラクターの性格や心情を描写した。制作スタジオは、3DCGによるアニメーション制作で近年高い評価を得る神風動画。木版画を思わせるフラットな描写ながらも、世界観を余すことなく表現する絵づくりが目を引く。また本作は映画館で効果音のみの映像を流しながら、声優が声を合わせミュージシャンが生演奏で音楽をつけるVoice Actor vs Silent Movie上映方式という挑戦的な試みを行ない、その場でしか得られない経験を重視した新たな上映形態も提示している。



© Kamikazedouga

第21回アニメーション部門新人賞

📍 国営沖縄記念公園(海洋博公園)

『舟を編む』 黒柳 トシマサ

三浦しをんの同名小説を原作に、黒柳トシマサが丁寧な映像表現でアニメーション化した。玄武書房の中型国語辞典『大波海』編纂の長い道のりを描く。口下手だが言葉への鋭い感性を備えた馬締光也と、言葉に入り込むのは苦手だがコミュニケーション能力の高い西岡正志。周辺の人間模様を交えながら2人が成長していく姿を中心に捉えることで、複数の媒体で展開されている本作の世界観を守りつつ人物像を掘り下げること成功している。おびただしい活字があふれる「言葉の海」や、静かに回転続ける観覧車のイメージは、音声や背景を含めた画面全体で主人公たちの心情を伝えるアニメーションならではの印象的なシーンをつづっている。



© Genbu Dictionary
Editorial Dept.



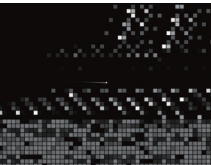
© Ryo ORIKASA

第21回アート部門優秀賞

📍 大宜味村立旧塩屋小学校(大宜味ユーティリティセンター)

『水準原点』 折笠 良

戦後を代表する詩人であり、シベリア抑留の経験をもつ石原吉郎(1915– 77)の詩「水準原点」を約1年にわたって粘土に刻印し、ストップモーション・アニメーションの技法で制作した映像作品。次々と沸き起こる白い粘土の波は徐々に大きくうねりだし、やがて『詩』が1文字ずつ現れる。文字は波紋をつくって現れては波に飲み込まれていくため、鑑賞者は1文字1文字を噛みしめるように鑑賞しなければならない。さざ波のシブルな反復が内包するドラマチックさを、クレイアニメーションの表現が引き出している。作家は、オスカー・ワイルド『幸福の王子』、萩原朔太郎『地面の底の病気の顔』などの文学作品をモチーフに、書くこと/描くことを運動=アニメーションとして提示する映像を制作してきた。斬新な水の表現と言葉の発生を捉える視点が高い評価を受けた。



© 2018 Torajiro AIDA

第21回アート部門新人賞

📍 大宜味村立旧塩屋小学校(大宜味ユーティリティセンター)

『I'm In The Computer Memory!』 会田 寅次郎

コンピュータの中で動作しているメモリを視覚化し、その中を探検する参加型インストールेशन。鑑賞者はタッチパネルでメモリの中を探索し、その様子は目の前の大きなスクリーンに映し出される。リアルタイムで動作しているメモリの中の様子は四角形のブロックで表示されており、その間を探索していく。メモリ内部に何らかの情報がプールされていることを視覚的に知ることができるが、その内容やそこにある理由を知ることは難しい。鑑賞者は本作を通じ、日頃使用するコンピュータのなかにある、不可視の世界を感じるようになる。本作のソースコード(プログラム)はソースコード管理サービスを通じてインターネット上に公開されている。



© 2018 INDUSTRIAL JP

第21回エンターテインメント部門優秀賞

📍 大宜味村立旧塩屋小学校(大宜味ユーティリティセンター)

『INDUSTRIAL JP』 INDUSTRIAL JP

日本の各地に点在する町工場内の音のフィールドレコーディング、工作機械が稼働する映像をサンプリングし、再編集によって楽曲化・ミュージックビデオ化して配信する音楽レーベル。パネやネジなどを製作する工場と多くのミュージシャンがコラボレーションし、アナログな工作機械の稼動音をクラブミュージックに仕上げ、2018年3月までに7作品がリリースされている。響き渡る機械の動作音と油に包まれながら動き光る工作機械は一定のリズムを刻み続け、それが美しい音と映像となって表現される。レーベル設立のきっかけは、グローバル化による国内産業縮小の影響を強く感じたことだという。日本の町工場の魅力を発信し、国内の製造業を盛り上げる一助となることを目指している。ウェブサイトには各工場へのインタビューが掲載され、音楽を通じて、町工場の高い技術力や、それにより生み出される最先端の製品の魅力を発信するプラットフォームとなっている。



© 2016 Unlimited Corridor
PROJECT Team

第20回エンターテインメント部門優秀賞

📍 大宜味村立旧塩屋小学校(大宜味ユーティリティセンター)

『Unlimited Corridor』 『Unlimited Corridor』制作チーム / 代表:松本 啓吾

鑑賞者の空間知覚を操作し、現実には限られた空間の中で、VR(バーチャル・リアリティ)空間を無限に歩き回れるようにした作品。本作では、「リダイレクトッド・ウォーキング」と「視触覚間相互作用」という2つの技術を組み合わせて使用している。リダイレクトッド・ウォーキングは、ヘッドマウントディスプレイに表示する映像に補正を加え、実際には曲がった通路を歩いているにもかかわらず、まっすぐ歩いていると感じさせる技術である。それに合わせて、曲面を平面として知覚させる視触覚間相互作用を利用し、直進していると感じられる通路の円周の大きさを、半径3mまで縮小し、比較的狭い実空間でも無限の空間知覚を得られるようにした。視覚と触覚を使い脳に錯覚を起こさせて、知覚がいかにゆらぎを持つものであるかを実感させる。VRシステムの機能に応じたオリジナルのコンテンツなどが提供されている。



© Aoi Ikebe
(AKITASHOTEN) 2017

第21回マンガ部門大賞

📍 大宜味村立旧塩屋小学校(大宜味ユーティリティセンター)

『ねえ、ママ』 池辺 葵

祖母の残した洋服店でその人だけの洋服を作り続ける『繕い裁つ人』(2009–15)、26歳の独身女性が運命の物件を探す『プリンセスメゾン』(14–)など、これまでさまざまな女性の生き方を描いてきた作者の短編集。本作には巢立ってゆく息子を持つ母親の思いが空回りする「きらきらと雨」、修道院に暮らす2人の少女の物語「ザザetヤニク」、骨董屋の店主をしている独り身のおばあさんと少女の交流を描いた「夕焼けカーニバル」など、「母」をモチーフにした7つの物語が収録されている。本書には実際の家族としての母だけでなく、修道女、家政婦、旅先で出会った老姉妹、近所のおばあさん、ママになることに憧れる少女など、誰かの「母」的な存在となる人物が登場する。彼女たちはみな理想の母親像ではなく、愚直で、凡庸で、時に狡猾であるが、それでも優しく温かな愛を持った存在として描かれる。それぞれのストーリーは緩やかに繋がり、「母」の愛も人と人の繋がりのおかげで周囲の人々に伝播してゆく。時折大きなコマで描かれる広々とした風景は、登場人物たちを包み込み、少ないセリフと大きな余白、柔らかな明暗のついた絵によって、読者には深い余韻を残す。



© Kentaro Ueno 2016

第21回マンガ部門優秀賞

📍 大宜味村立旧塩屋小学校(大宜味ユーティリティセンター)

『夜の眼は千でございます』 上野 顕太郎

1998年より『月刊コミックビーム』(KADOKAWA)で連載されている同誌最長連載のギャグ読切シリーズの単行本化作品。名作マンガや映画を題材に、高座の噺家の語りをそのままマンガにした「落語マンガ」のシリーズをはじめ、さまざまな芸術家の画風で描いた交通標識が実際に現れるナンセンスコメディや、かるた、法廷画家、テレビショッピング、シュベルトの『魔王』をネタにしたコメディ、さらに水木しげる、生頼範義、望月三起也らの追悼企画パロディなど、さまざまな趣向と技巧を凝らした読切作品、全42話が収録されている。作者は1983年のデビュー以来、『帽子男は眠れない』(1992)『ひまあり』(2000-02)など、緻密に描き込まれた作画と、不条理でシュールなギャグを得意とし、本作においても、渾身の力で放たれる、たたみかけるようなギャグ・パロディの連続に、独特の構成力・演出力が生かされている。



© Yukihiro Yoshihara

第20回アート部門優秀賞

📍 オクマ プライベートビーチ&リゾート

『培養都市』 吉原 悠博

東京都心から新潟の柏崎刈羽原子力発電所までの「高電圧送電ケーブルのある光景」を4K一眼レフカメラで撮影／編集し、縦長の映像で投影する映像インストールेशन。投影にはハイビジョンプロジェクターが用いられている。2012-15年の約2年半のあいだ、両地域を結ぶ山間部のダム、国内最長河川・信濃川沿いの町村を何度も往来して撮影された。新潟は日本有数の米作地域である。そこを流れる信濃川を分水し、美田を保つための治水システムが完成を迎える1970年頃に減反政策が始まる。またその頃、原子力発電所の計画が動き出した。急速に経済発展した日本のなかで、互いに依存しあう東京と新潟との関係が鮮明になる。巨大電力消費地・東京に暮らす人々への、またかつて東京に生きた新潟県民である作者自身への問いとして、高電圧送電ケーブルが象徴する「地方と首都の極端な非対称関係」を顕在化させた。



© SHIMURABROS.

第13回アート部門優秀賞

📍 オクマ プライベートビーチ&リゾート

『SEKILALA』 志村 詠佳 / 志村 健太郎 SHIMURABROS.

ある家族の物語。舞台は、あたかもひと続きの世界のようである。だがそれは、高度な仮想現実技術で結びついた断絶の世界。生活に疎外感を感じながらも、生の感覚を抑圧してきた父親は、組織工学による生きた家具「バイオフィニチャー」と出会う。3つのスクリーンに展開される開かれた物語は、新たな物語を紡ぎつづける。